

親石となられるイエス

ルカ 20 : 9 - 19



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022年4月3日

大齋節第5主日

上野聖ヨハネ教会にて

いま朗読した今日の福音書の最初と最後に、同じ言葉が出て来たのに気づかれたでしょうか。こんなふうに始まりました。

「イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。」ルカ 20:9
最後はこうでした。

「そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。」ルカ 20:19

イエスが語られた相手は民衆。イエスを捕らえようとした人びとが恐れたのは民衆。民衆がイエスを囲んでいて、イエスを守ったのです。

その民衆とはどのような人たちか。イエスの話を聞きたいと願って集まった人たちです。悩みを抱えて、イエスに助けと救いを求めた人たちです。もっと言うなら、イエスを愛していた人たちです。

しばしばこういうふうに言われるのを聞きます。イエスさまが最後にエルサレムに入城されたとき、歓声を上げてイエスを迎えた人たちは、数日後には、捕らえられて裁判にかけられたイエスを前にして「殺せ、殺せ」と叫んだのだと。

そういう人たちもたくさんいたに違いありません。無責任な、主体性のない群衆です。けれども、最後までイエスを愛して、イエスを支持していて、イエスが捕らえられて死刑場に引いて

行かれるのを深く悲しんだ人たちがいた。力がなかった。声を上げることができなかった。しかしイエスを最後まで愛していた人たちがいたのです。そのことを見失ってはなりません。それがここに出てくる「民衆」です。

願わくはわたしたちも、イエスの話を聞こうとして集まる民衆でありたい。イエスを愛する民衆でありたい。イエスの受難を悲しむ民衆でありたいと願います。

イエスはこの民衆にたとえを語られました。目前に迫ったご自身の命の危機を感じながら話されたのです。

「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。ところが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した。」ルカ 20:9-10

このたとえで、ぶどう園を作って農夫たちに貸し与えたのは神さまです。ご自身の大切なぶどう園を農夫たちにゆだねられた神さまは、収穫を一緒に喜び分かち合おうと、期待して待つておられました。

収穫の時が来て、神さまは僕を遣わされました。ところが農夫たちは、神さまが送られた僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した。収穫を全部独占するつもりです。二度目に

送られた次の僕は、同じように袋だたきにされ侮辱されて追い返された。三度目に送られた僕は、傷を負わせられて放り出されました。そこでぶどう園の主人たる神さまは、ご自身の愛する息子なら敬ってくれるだろうと期待して、息子を送られた。すると農夫たちはよからぬ相談をします。

「農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」 20:14-16

今や間近に迫っているのはこの事態です。力を持った農夫たち、つまり律法学者や祭司長たちは、神さまが最後に送られたご自分の愛する息子、つまりイエスを殺そうとしている。こうして彼ら指導者たちは、みずから神の^{さば}審きを招き寄せている。

これを聞いて民衆は「そんなことがあってはなりません」(20:16) と言いました。すると

「イエスは彼らを見つめて言われた。」 20:17

イエスが民衆を見つめられる目は、どのような目だったのでしょうか。悲しみの目。同時に、この危機が迫る今、自分を信頼して真剣に話を聞いてくれている人びとを慈しむ目。心配す

る民衆の目と、民衆を慈しまれるイエスの目が出会います。この人びとにイエスは言われました。

「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。

『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』

20:17

「書いてある」というのは聖書に書いてあるということで、詩編 118 編 22 節の引用です。

石で家を建てます。「家を建てる者」が石を選んで積み重ねます。彼らは、ある石を捨てててしまいます。これはいけない。もっと言えば邪魔なのです。だからこの石は捨てて外にほうり出して見えないようにしてしまう。

そのように捨てられて外にほうり出されようとしているのはだれか。この話をしておられるイエスです。自分はまもなく捨てられ、殺される。

しかしそれで終わりではありません。

『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』

無用のもの、邪魔なものとして捨てられたその石が、隅の親石 (corner stone) となった。捨てられた石が、まったく別の建物を建てる中心の石、親石、^{かなめ}要の石となる。権威と権力、強欲で支配された社会とはまったく別の建物が造られようとしています。神が新しい家を造ろうとされている。愛と正義と平和で結ばれた人びと、真心と祈りで結ばれた民衆が安心して憩える

神の家。その新しい家のために、その捨てられた石こそは隅の親石、言い換えれば家の土台となるのです。その石とは、イエスさまご自身のことです。

『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』

この詩編の言葉どおりのことが今、起ころうとしています。

捕らえられ、苦しみを受けて殺される神の子イエスは、新しい神の家の親石、礎石、土台となられる。

このイエスの譬え話を聞いた律法学者たちや祭司長たちは、それが自分たちへの当てつけであると気づき、イエスを捕らえようとしたが、「民衆を恐れた」(20:19)。この時、民衆がイエスを守ったのです。

イエスは殺されて死なれます。しかしイエスは三日目によみがえり、やがて弟子たちは聖霊を注がれて教会が誕生します。新しい神の家です。祈りと真心で結び合わせられる信仰の共同体です。その中には、あの譬えを真剣に聞いていた民衆が招き入れられているはずです。わたしたちもその民衆のひとりでありますように。

祈ります。

神さま、わたしたちを、イエスさまを愛したあの民衆のよう
にしてください。あなたが建築される愛と平和と祈りの家に住
まう者としてください。あなたの家の親石となり土台となっ
てくださった主イエスのみ名を賛美します。アーメン